

クワインの自然主義

薄井 尚樹

1. はじめに

クワインは自身の哲学的立場を「自然主義」と称し、それを自然科学と関連させて、次のように特徴づける。

私は、哲学を、科学に対するアプリオリな基礎研究や土台といったものではなく、科学と連続的なものとみなす。私は、哲学と科学を同じ船のうちにあるものとみなすのである。私がしばしばそうするように、ノイラートの比喩に立ち戻ると、それは、我々が浮かび続けながら洋上でのみ修繕できるような船である。いかなる外在的な視点も、いかなる第一哲学も存在しない⁽¹⁾

このようにクワインによると、哲学の課題とは、科学的な世界理解の外部からではなく、世界理解に内在的に、すなわち経験的・科学的手続きに則って解決可能でなくてはならない。それゆえクワインは、世界理解をその外部から基礎づけることを目標としてきた伝統的な認識論的課題を達成不可能なものとし、次の引用にあるように、「認識論の自然化」に伴う循環を、我々が甘受すべき、いわば「良き循環」とであると論じる。

自分の感覚受容器の刺激こそ、誰であれ自分の世界像に到達する際に究極的に利用可能な証拠のすべてである。それでは、なぜこの「刺激から世界像の」構築が実際にどのように進行するのか、ということだけに目を向けてはいけないのか。なぜ心理学に甘んじてはいけないのか。そのように認識論上の課題を心理学に明け渡すことは、昔であれば循環論として許されなかったことである。認識論者の目的が経験科学の基盤を確実なものとすることにあるとすれば、その際に心理学や他の経験科学を使用することは、そういった認識論上の目的を傷つけることになる。しかし、そのような循環に対する躊躇は、観察から科学を演繹しようという夢をやめれば、ほとんど問題にはならない。観察と科学との間の結

合だけを理解したいのであれば、まさにそういった理解の対象となる科学によって与えられるものを含む、利用可能な情報すべてを使用すべきなのである⁽²⁾

それでは、クワインがこのように伝統的な認識論的プログラムを批判し、自然主義に関与する背景には、いかなる哲学的主張が存在し、その主張はいかなるかたちで自然主義を帰結するのだろうか。そしてその際のクワインの議論には整合性が保たれているのだろうか。本稿はこれらの問題に解答を与えることを目標とする。以下でその問題を検討するにあたっては、次の「経験主義の五つの里程碑」における記述を手がかりとしたい。

自然主義は、その双方が否定的なふたつの源泉 (source) を持つ。ひとつは、文脈的定義でさえ、理論的用語を現象という観点から一般には定義できない、といった絶望である。全体論的もしくは体系—中心的態度は、こういった絶望を惹起するのに十分なはずだ。自然主義のもうひとつの否定的源泉は、頑健な実在論 (unregenerate realism)、科学に内在する克服可能な不確実性を越えたところに苦境を感じることがまったくない、そういった自然科学者の堅固な心の状態である⁽³⁾

本稿は、上の引用を手がかりに、次のように進行する。第2・3節では、「全体論」と「頑健な実在論」というふたつの源泉から自然主義を導出するプロセスを、クワインの議論を参照しつつ再構成する。その再構成は次のようなものである。全体論と頑健な実在論というふたつの源泉はそれぞれ、「ノイラートの船」によって示されるクワインの知識観のふたつの主題、「知識の相互依存性」と「知識の歴史的不可避性」によって特徴づけられる。そしてこれらの主題は、その各々が物理主義と行動主義というクワイン哲学の基本的立場を基盤とするものであり、そういった立場からの懐疑論の論駁を通して自然主義への関与に至ることになる。以上の再構成を踏まえて、第4節では、ふたつの源泉が導出する立場、すなわち物理主義と行動主義を基盤に論じられる自然主義的立場には、ある多義性が見出されるのではないかという批判を提示する。そしてこの批判に答えるために、物理主義と行動主義との間のコントラストが明確に示される「理論の不完全決定性」と「翻訳の不確定性」との間での整合的な区別を試みる。第5節では、クワインが近年そのような整合性を自ら破るような記述をしており、そのような変化は、クワインの自然主義の基本テーゼと矛盾するのではないかという問題を、今後の課題として提示する。

2. 相互依存性

こういった〔認識論と自然科学の〕相互作用は、古き循環の脅威をふたたび思い出させるものだ。しかし、我々はいまや、センスデータから科学を演繹するという夢を放棄した。我々は、世界における制度もしくはプロセスとしての科学という理解にしたがう。そしてそういった理解は、その対象である科学よりも優れたものであるように意図されているわけではない。こういった態度は、実際には、ノイラートが、洋上に浮かびながら自身の船を修理する必要に迫られている水夫、といった比喻を用いて、ウィーン学団の時代にすでに主張していたものである⁽⁴⁾

このように、「ノイラートの船」という比喻によって表される、哲学と科学、およびその両者の関係についての理解は、「知識の相互依存（循環）性」という主題をもたらす。しかし先に見たように、クワインはこのような相互作用を「悪しき循環」とはせず、我々が受け入れざるをえない「良き循環」であるとみなしている。この理由を説明するためには、クワインが自然主義の源泉のひとつとした「全体論」を考察しなくてはならない。

2-1. 全体論

クワインは、懐疑論の主張には必ずなんらかの（自然科学の）背景知識が必要とされるという洞察にもとづいて、懐疑論を「自然科学の内部から生じる自然科学への挑戦」⁽⁵⁾とみなす。そして、そのような主張から、我々の世界理解全体を懐疑の対象とするようなグローバルな懐疑論はそもそも主張可能なものではない、と結論づける⁽⁶⁾。

それでは、クワインはなぜこのような文脈主義的解答をなしうるのだろうか。このような懐疑論に対する文脈主義的解答は、クワインの全体論から導かれたものである。ここで、クワインの全体論的立場を哲学的に説明すれば次のようになる。理論的言明をセンスデータ言語へと翻訳することによって証拠関係を明示しようとしたカルナップのプログラムに対して、クワインは「経験主義のふたつのドグマ」において、理論的言明を決定的に支持できるような証拠関係は存在しえないと論じ、全体論的なモデルを対置する。

... 科学全体はその境界条件が経験であるような力場に似ている。... [中略] ... しかし、場全体は、その境界条件である経験によって不完全に決定されているので、理論と対立するひとつの経験が与えられていると、それに照らしてどの言明を再評価すべきか、という

ことに關しては、とてつもなく広い選択の余地が存在する。いかなる特定の経験も... [中略] ... 場の内部の特定の言明と結びつけられているわけではない⁽⁷⁾

そしてクワインは、このような全体論的な知識観を背景に持つことで、懷疑論の論駁が可能になる。すなわち、そういった知識観によると、我々の知識はネットワークをなしている（それゆえ「体系—中心的」）のだから、我々はそのネットワーク全体を疑うべき独立の足場を持ってない、と論じることができるのである。

2-2. 相互包括論証

先に考察したように、クワインは懷疑論を否定するにあたって、懷疑論は実際には自然科学の知識を背景に主張されている、という論点を持ち出す。換言すれば、知識の相互依存性のひとつのありかたとして、存在論（自然科学）と認識論（懷疑論）の相互依存関係に着目することで、クワインは懷疑論を否定するのである。クワインは、この論点を「自然科学と認識論の相互包括（reciprocal containment）」と表現し、本節の冒頭で引用した「ノイラートの船」の比喩が持ち出される箇所の直前で次のように説明する。

古き認識論は、ある意味において、自然科学を包括することを望んだ。すなわち、それは、自然科学をとにかくセンスデータから構成しようとしたのである。新しい設定のもとでの認識論〔自然化された認識論〕は、逆に、心理学の一章として自然科学のうちに包括されることになる。しかし古い包括関係またそれ相当に妥当なままであり続ける。我々は、我々の研究主題である人間という対象が、いかにして物体を指定し、自身のデータから物理学を描き出すのか、ということを研究している。そして、世界における我々の立場はそれに類似したものである、ということを我々は認めているのである。ゆえに、我々の認識論的企図そのものと、その認識論的企図の内部で一章を形成する心理学と、心理学がその構成学科となるような自然科学の全体、こういったものはいずれも、我々の認識論的主题に割り当てていた物体や物理学と同じように、我々自身が刺激から構成し、描き出したものにほかならない。このようにして、相互包括関係が、異なる意味での包括関係ではあるが、存在することになる。すなわち、それは自然科学のうちへの認識論の包括であり、認識論への自然科学の包括である⁽⁸⁾

ここで、全体論を源泉とするクワインの自然主義を次のように説明できる。知識の相互依存性を自身の知識観のひとつの主題とするクワインにとって、存在論（物理主義）と認識論（経験主義）は、上の引用にあるように相互包括の関係にある⁹⁾。クワインの認識論的プログラムは、認識論という企図を、経験的心理学、すなわち（物理主義的存在論を前提とする）自然科学の一分野として理解する。それゆえ認識論（経験主義）は存在論（物理主義）へと包括される。他方で、自然科学が前提とする物理主義的存在論は、それ自体、感覚経験を証拠として一定の存在者を指定するのだから、経験主義的前提のもとで、その主張を行っていることになる。それゆえ自然科学の存在論（物理主義）は認識論（経験主義）によって包括されるのである。そして、このような相互包括関係を背景に、クワインは、自然主義をある種の科学主義的立場として定式化することができるのである。

3. 歴史的不可避性

我々の船が浮かび続けるのは、毎回の改造に際して、その大部分を継続中の関心として、手を入れないからである。... [中略] ... 我々は、たとえ、どこで終えるかということにおいて制限されていないとしても、いかにしてはじめることができるか、ということにおいては制限されている¹⁰⁾

このように、「ノイラートの船」は、相互依存性だけでなく、我々は世界認識の出発点において特定の知識を背負われ、それに制限されている、といった「歴史的不可避性」の比喻としても用いられる。本節ではこの主題を背景に、自然主義の源泉のひとつである「頑健な実在論」を説明し、頑健な実在論はいかなる哲学的立場をもたらすか検討する。

3-1. 頑健な実在論

前節で考察したように、知識の相互依存性を背景に、クワインはグローバルな懐疑論に対して文脈主義的に解答をすることができた。しかしクワインは、他の箇所においては、懐疑論に対して次のようにコメントする。

我々は、外的世界の实在性を有意義に問うことはできない。もしくは、我々の感覚的証言のうちに外的対象の証拠が存在するということを否定することはできない。というのも、そうすることは端的に、「实在」や「証拠」といった用語を、なんであれそういった用語

が我々に対して持っている理解可能性をその用語にもともと授けていたような、まさにその適用から切り離すことになるからである⁽¹¹⁾

これは前節で考察した懐疑論の論駁とは異なることに注意せねばならない。というのも、クワインは、上の引用の少し後で「認識論における常識の役割」を強調するからである。

常識の核心部分を否認すること、物理学者と市井の人の双方が平凡なものとして受容するものに証拠を要求することは、賛えるべき完全主義ではない。それは甚だしい混同であり、大事なものと無用なものの素晴らしい区別を観察しそこなうことである⁽¹²⁾

それではなぜクワインは、グローバルな懐疑論が主張するような「常識の否認」を「甚だしい混同」として退けることができるのだろうか。このようなクワインの態度の根底には、以下で考察するような行動主義的な言語観が存在するように思われる。

クワインは、自身の言語観を論じるにあたって、それと対比されることになる伝統的な言語観を「博物館の神話」と名づけて次のように説明する。「無批判な意味論は、その展示物が意味であり、その単語がラベルであるような博物館、といった神話である。[それによると] 言語を切り替えることは、そのラベルを変えることである」⁽¹³⁾。そして、「ある人の意味論を、彼の明確な行動傾向のうちにインプリシットにあるものを超えて、とにかく彼の心に定まったものとみなす限り、意味論は有害な心理主義に損なわれる」⁽¹⁴⁾と伝統的な言語観を批判し、その代わりに、言語というものを「同一言語の話者なら必ずや互いに似てくるような、現在の言語的な行動傾向の複合体」⁽¹⁵⁾とみなすような言語観を展開する。その相違は端的には次のように述べることができる。博物館の神話によると行動傾向とは意味の徴候にすぎない。それゆえ、その行動の背景には、意味を決定する（たとえば）心的状態が想定されることになる。それに対して、クワインの言語観によると、そういった行動傾向を除いて、意味（の決定要因）にはなにも残されていないのである。

したがって、意味を行動から独立したものとみなす博物館の神話と異なり、クワインにとっての言語理解とは、他者の行動のうちに規則性を見出す能力にほかならない⁽¹⁶⁾。つまり、他者の行動のうちに知覚的類似性を見出す本性的な帰納能力が言語理解に要求されるのである。その結果クワインは、「理解を言語的傾向へと還元するような解決策」⁽¹⁷⁾の採用が可能になり、言語理解とは次にあるように「統計的結果」に帰着することになる。

行動主義的に考察される場合、理解とは統計的結果である。それは多様性に存する。その核は単語であり、核を取り囲む主要部分 (mass) は、その単語が生起する無数の文から作り上げられる。この主要部分の色彩が際立って健全であるか、それとも不健康であるかによって、その語とその文は理解されている、もしくは誤解されているとみなされるのである。そして〔その間に〕明確な境界線が求められる必要はない⁽¹⁸⁾

ここで、クワインの言語観にもとづいて、次のように「理論と言語の不可分性」を主張することができる。クワインの言語観によると、ある人が言語を話していると言えるための証拠は、一群の言明に対してなんらかの言語的傾向を所有することである。クワインにとって、言語とはそういった発話傾向の複合体にはかならないのだから、そういった証拠は、その人はその言語の使用者であるという事実に関して構成的である。すなわち、言語使用者であることの証拠と事実は不可分なのである。そのためクワインは、(たとえばカルナップとは対照的に) 言語を経験的事実に関与しない中立的枠組として理解することはない。ここで、他者の言語的行動を識別する本性的な帰納能力によって獲得されるような、常識的事物に関する世界理論を、科学理論と対比させるために、「常識 (的世界観)」と呼ぶことにする。その場合、言語理解とは、一群の経験的判断から構成される常識的世界観、すなわち「頑健な實在論」を受容することである、と主張することができるのである。

3-2. 不可避性論証

先の考察から理解されるように、頑健な實在論は「常識と言語の不可分性」という主張の帰結である。そしてそのように理解された頑健な實在論 (常識の不可避性) は、次のようなかたちで自然主義を導出することになる。

クワインの言語観にしたがうと、言語を理解するということは常識的世界観を受容するということである。思考をなすためには言語が不可欠である以上、我々は世界認識の出発点において、一群の経験的判断から構成される常識的世界観の内部に制限されることになる。したがって、我々は世界認識そのものを論ずる (認識論を展開する) にあたって、特定の世界認識から独立した中立的立場に立つことはできない。我々は、世界体系をその外部から基礎づける企図として哲学を理解することを放棄せざるをえないのである。

このような不可避性論証は、相互包括論証と異なり、知識の通時的な連続性を強調するものであって、科学主義的な含意を伴うわけではないことに注意せねばならない。クワインによると、他者から言語を学習することは、一群の経験的判断を共有することである。

そしてその意味で、我々は「知の運び手 (lorebearers)」⁽¹⁹⁾となる。しかしここでの「知」には、相互包括論証で示唆されるような科学主義的な意味は付与されていないのである。

4. 世界認識／言語理解

クワインは、自然主義への関与を正当化するにあたって、自身の基本的立場である物理主義と行動主義を基盤として、ふた通りの論証を想定する。すなわち「(物理主義的) 存在論と認識論は相互包括関係にある」という知識の相互依存性と、「常識的世界観と(行動主義的に理解された) 言語は不可分である」という知識の歴史的不可避性、これら各々によって、自然主義への関与は正当化され、その内容が説明されるのである。

問題は、先に指摘したように、相互包括論証と不可避性論証が想定する「知識」の隔たりにある。相互包括論証と不可避性論証の双方を、自然主義への関与を正当化する論証として整合的に理解できるのだろうか。この問題を検討するにあたっては、「世界認識」と「言語理解」に対するクワインの態度のギャップを理解しなくてはならない。本節では、そのギャップを考察し、その考察を背景にクワインの自然主義を論じることしたい。

4-1. 不完全決定性／不確定性

世界認識と言語理解に対するクワインの態度のギャップを明確に示すものとして、以下では「理論の不完全決定性」と「翻訳の不確定性」の区別可能性に関わる論点を検討する。

クワインの全体論が示唆するように、大部分の言明は独自の経験的内容を持たないのだから、理論を決定的に確証するような証拠は存在しえない⁽²⁰⁾。それゆえ、理論はデータによって不完全にしか決定されない、という理論の不完全決定性が帰結する。他方で、翻訳の不確定性もまた、言明の意味はその言明の検証条件であるという意味の検証理論に関与することで、理論の不完全決定性と同じ形式で主張されることになる⁽²¹⁾。

したがって、不完全決定性と不確定性は双方とも同じ形式で、つまりデータによる理論の不完全決定というポイントにおいて主張される。しかしクワインは、「たいていの場合、[物理理論を構成する] 真理のパラメータは便宜的に固定されたままである。翻訳のパラメータを構成する分析仮説はそういったものではない」⁽²²⁾と述べることで、そのふたつを区別しようとする。クワインによると、物理理論はたとえ不完全決定されているとしても、我々はそれを暫定的に保持せざるをえないことは対照的に、翻訳マニュアルが不完全決定されている場合には、物理理論と異なり、暫定的にさえ保持する必要がないのである。

不完全決定性／不確定性の区別可能性は、クワイン自身を含む多くの哲学者によって批判や擁護がなされてきたため、本稿でその議論状況を検討することはできない。以降では

「認識的規範」というポイントに絞って、その区別可能性を考察することにした。

4-2. 認識的規範

4-2-1. 世界認識

クワインの認識論は、伝統的主題を受け継ごうとするクワイン自身の意図とは異なり、伝統的認識論が担っていた規範的役割を果たしていないと、しばしば批判にされてきた。しかしクワインは、「自然化された認識論」で述べられたプログラムを理論的認識論における自然主義的アプローチとして位置づけ、「自然化された認識論」の視野には入っていなかった規範的認識論も同様に自然化が可能であると論じようとする⁽²⁾。

クワインの戦略は次のようなものである⁽²⁴⁾。認識における規範は、「終末のパラメータ」としての認識的目標が表現される場合に、記述的に扱うことが可能になる。つまり、自然科学の成果を用いることで、なんらかの望まれた認識的目標を達成するためにとるべき最善の方法が示されることになるのである。したがって、クワインにとっての認識的規範は、「もし目的が～であるとすれば、～をすべきである」といった、実質的には因果関係を示す科学的仮説であるような、手段-目的関係を示す形式から構成されることになる。

このような科学的仮説としての認識的規範は、第2節でみたように、「存在論と認識論の相互包括」といった論点を背景に、世界認識における規範としての身分が保証されることになる。逆に言えば、存在論的な裏づけを持たない規範は、認識論と相互包括関係にあるべき存在論的基盤を欠くために、世界認識において有効な規範とはなりえないのである。

4-2-2. 言語理解

言語理解の状況においては、このような認識的規範に関する主張が成立しえない、ということに注意しなければならない。クワインの言語観によると、そもそも言語理解においてはいかなる規範も必要とはされないのである。

このことを理解するためには、第3節の議論に戻らねばならない。言語的行動主義に関与するクワインにとって、言語理解とは「統計的結果」に帰着するものであり、言語理解とは他者の行動のうちに規則性を見出す能力にほかならない、と論じられた。常識的世界観への関与は不可避であるという論点から理解されるように、クワインによると、言語理解それ自体は正当化できない。我々は、好むと好まざるとに関わらず、その能力を使用せざるをえない、そのほかにいかなる選択もなしえないのである。第3節で考察したように、クワインは、このような主張をもとに、「頑健な実在論」を自然主義の源泉のひとつとみなすことができた。そういった不可避性をクワインは次のように説明する。

クリストファー・フックウェイは、認識的評価についての論点として、我々はなぜ帰納に頼る資格を持つ (entitle to) のかという疑問を引き合いに出す。私の立場は、我々はある程度までは頼らねばならない (bound to) が、そうする資格を持つわけではない、というものだ。／我々は、自然淘汰によって賦与された本性的な神経系回路にしたがって [帰納に] 頼らねばならない。... [中略] ... こういったことはすべて [我々の帰納的推論に反するような] 自然の流れにおける大規模な変化と両立しうる。それゆえ私はいかなる資格付与 (entitlement) も認めないのである。そのような変化は、我々のもっとも堅固な科学法則に矛盾するだろうが、このように論じることは、帰納的に論じることであり、ゆえに論点先取である⁽²⁵⁾

クワインによると、言語理解 (常識的世界観の受容) は正当化されうるものではないが、それにもかかわらず、我々はそれに関与せざるをえない。そしてその不可避性は、引用で示唆されているように、生物的な初期条件として (正当化ではなく) 説明されることになる。このような議論から、常識的世界観の不可避性 (頑健な実在論)、さらには第一哲学の否定といった、クワインの自然主義の基本テーゼのひとつが帰結するのである。

フェレスダールは、不完全決定性／不確定性の区別可能性について、次のように説明する⁽²⁶⁾。意味は、世界認識と異なり、共同体の構成員がお互いの行動傾向から作り上げた共同作業の所産である⁽²⁷⁾。そのため、自然科学の対象である「世界」が我々の発見から独立に存在することは対照的に、言語理解の対象である「意味」(常識的世界観を構成する一群の経験的判断) は、クワインの言語観から明らかのように、我々の言語的行動から独立して存在することはありえない、と。我々は、複雑な思考を伴う世界認識をなす以前に、他者の行動から言語を理解することで、共同体に参加せざるをえない。クワインの言語観を考慮すると、このことは不可避であった。そして、そのような常識的世界観を出発点とすることによってはじめて、我々は自然の探求に向かうことが可能になるのである。

それゆえ、クワインによると、言語理解は本質的には能動的に選択可能な規範をまったく必要としない。次に挙げた『言葉と対象』からの引用にあるように、翻訳場面でフィールド言語学者が一般に想定する規範の多くは、検証不可能であるという点で、「発話行動の実質的法則」から明確に区別されるのである。

[不確定性の論点を理解しそこなう] 第5の原因は、言語学者が、分析仮説の選択を狭め

るのに役立つようなインプリシットな補完的規準 (canon) に固執する点にある。たとえば、ネイティブのある短い言い回しを「ウサギ (rabbit)」に、長い言い回しを「ウサギ部分 (rabbit part)」に相当させるべきか、あるいはその逆にすべきか、という問題が生じたとしたら、言語学者は、顕著に分離した単位はそれだけ単純な名辞を担う傾向があると主張して、前者のやり方を好むだろう。そういったインプリシットな規準は、発話行動の実質的法則と誤解されない限り、まったく問題はない⁽²⁸⁾

ともかく、独自に翻訳できる文〔観察文〕を超えてそのような仮説〔分析仮説〕を描き出す場合、実際には、ネイティブの心に我々の言語的アナロジーのセンスを検証不可能な⁽²⁹⁾たちで押しつけていることになる⁽²⁹⁾

以上の議論から、言語理解と世界認識を、不完全決定性と不確定性の区別を通して次のように説明できる。言語を理解するには一群の経験的判断への関与が不可避であり、言語理解の対象となるそういった経験的判断は、フェレスダールが論じるように（世界認識と異なり）我々の行動から独立に存在することはない。そして、そのように世界認識から区別される言語理解は、本質的には能動的に選択可能な規範を必要としないのである。

5. おわりに

これまでの議論から次のように結論づけたい。認識論の主要な課題である「正当化」という観点から見ると、相互包括論証と不可避性論証は、そのいずれもが自然主義を帰結するにもかかわらず、次のようなコントラストを呈する。相互包括論証は、認識論の主要な流れのひとつである基礎づけ主義を批判し、リニアな正当化関係に対して相互依存的なモデルを対置する。そして、そういったモデルのありかたのひとつである「存在論と認識論の相互包括」という論点から、認識論を科学主義的に理解する。他方で不可避性論証は、常識的世界観は正当化できないにもかかわらず不可避であるという論点から、認識論の内在性を強調し、そこから第一哲学という企図を否定する哲学的立場が帰結する。このふたつの論証は、その各々が、「ノイラートの船」によって示されるクワインの知識観のふたつの主題をその背後に持つ（つまりその各々がクワイン哲学の基本的立場である物理主義と行動主義を基盤とする）という意味において、クワインの知識論を形成するうえで不可欠な論証であるが、科学主義への関与において相違が存在し、結果として、クワインの自然主義が多義的なものではないかという批判を生じさせることになった。しかしこのような

多義性は、前節で考察されたような言語理解と世界認識との間の区別を導入することで解消される。言語理解と世界認識を認識的規範という観点から明確に区別し、かつ、世界認識が（たとえその出発点では、言語理解に伴う常識的世界観の受容が不可避だとしても）科学主義的に、つまり存在論的裏づけを伴った規範にしたがって進行するとすれば、クワインは依然として、科学主義的立場としての自然主義に関与できるのである。

最後に、本稿では触れることのできなかつた問題を、今後の課題として提示したい。クワインは、先の『言葉と対象』からの引用にあったように、言語理解における格率として、「我々とネイティブとの間の一致を最大化せよ」という内容の「寛容原理」を主張する。このような規範は、検証不可能なものであり、それゆえプラグマティックな地位しか与えられることはなかった。しかしその後クワインは次のような主張をなすようになる。

翻訳に向かうと、一般的な事例で最大化することが望まれるのは、真理、もしくはネイティブと我々との間の一致といったものではなく、我々の直観的な通俗心理学 (folk psychology) にしたがう、心理学的なもつともらしさ (plausibility) である。... [中略] ...
このことは、真理を最大化しようと試みることで獲得されるものよりも有用な翻訳を与える。観察文における出発点でさえ、我々はもつともありそうな行動過程を求める。その際に伴う素朴心理学は感情移入 (empathy) の問題であり、それはディルタイなどの解釈学的方針と結びつくことになる⁽⁹⁾

このようにクワインは、寛容原理を「心理学的なもつともらしさを最大化せよ」という格率として再定式化しており、さらに、観察文理解における寛容原理の必要性を認めていることから、寛容原理の経験的地位を認める立場へとシフトしているように思われる。しかし、寛容原理が経験的な地位を持つものであり、また、世界認識とは別の場面で独自に機能しうる規範であるとすれば、このことは、クワインの自然主義の基本テーゼである「方法論的一元論 (methodological monism)」⁽¹⁰⁾に対する脅威にはならないのだろうか。

寛容原理の内容や認識的地位における変化の背景には、非法則論的一元論への関与、刺激意味の位置づけといった、主にデイヴィッドソンによる批判への応答という動機が存在するように思われるが、それを検討することは本稿の範囲を超えることになる。それゆえ、このような（言語もしくは他者理解における規範の総称としての）寛容原理の認識論的地位に関わる問題を、クワインに限らず、自然主義という哲学的立場を一般に評価するにあたっての課題として提示することで、本稿を終わりたい。

註

- (1) Quine[1969c] pp.126-7
- (2) Quine [1969b] p.76
- (3) Quine [1981] p.72
- (4) Quine [1969b] pp.83-4
- (5) Quine [1974] p.2
- (6) Quine [1975a] pp.67-8
- (7) Quine [1953] pp.42-3
- (8) Quine [1969b] p.83
- (9) 以下で論じられる相互包括論証の内容は、ギブソンによる議論 (Gibson [1986]) を参考にした。
- (10) Quine [1960] p.4
- (11) Quine[1976] p.229
- (12) Quine [1976] pp.229-230
- (13) Quine [1969a] p.27
- (14) Quine [1969a] p.27
- (15) Quine [1960] p.27
- (16) 第3節の以下の部分で論じられる、言語理解の能力、理論と言語の不可分性、およびそこから自然主義を導出する論証 (本稿では不可避性論証と呼ぶ) といった論点は、ヒルトンによる議論 (Hylton [1991] [1994]) を参考にした。ただしヒルトン自身は、本稿と異なり、そういった論点を「経験主義の五つの里程碑」で主張されるふたつの源泉とは別のものとみなす (Hylton[1994] pp.268-70)。
- (17) Quine [1975b] p.88
- (18) Quine [1979] p.141, Quine[1992] p.59
- (19) Quine [1976] p.230
- (20) 実際には、「経験主義のふたつのドグマ」でほのめかされていた、いかなる言明も独自の経験的内容を持たないという「極端な全体論」は後に弱められることになり、代わって、観察性を程度問題として理解するような「穏健な全体論」が主張されるようになる (Quine [1981] p.71)。しかし本稿では、議論を簡潔にするために、そういった問題を考察しないことにする。
- (21) Quine [1969b] pp.80-1
- (22) Quine [1960] pp.75-6
- (23) Quine [1992] p.19
- (24) Quine [1986] pp.664-5, Quine [1992]§8
- (25) Quine [1994] p.502-3
- (26) Føllesdal [1990] pp.103-4
- (27) フェレスダールはこのような主張を MMM (man-made-meaning) テーゼとして、次のように定式化する。「言語表現の意味とは、その言語の学習者と使用者がその意味を決定するのに役立つような証拠すべての複合的な産物である」(Føllesdal [1990] p.103)。またクワインは、そのテーゼを支持するにあたって次のようにコメントする。「重要なのは、言語の意味は観察可能な状況における観察可能な行動の機能である、ということにすぎない。... [中略] ... / より広い行動主義は無関係である。物理主義は無関係である。一元論は無関係である」(Quine [1990a] p.110)。ここで、意味における行動主義的想定と物理主義が無関係なもののみなされていることに注意しなくてはならない。
- (28) Quine [1960] p.74 強調引用者
- (29) Quine [1960] p.72 強調引用者
- (30) Quine [1990b] p.158 強調引用者
- (31) Quine[1981] p.71

参考文献

Barrett, R. & Gibson, R. (eds)
1990: *Perspectives on Quine* (Cambridge, Mass.: B.Blackwell)

- Føllesdal, D.
1990: "Indeterminacy and Mental States", in Barrett & Gibson [1990] pp.98-109
- Gibson, R.
1986: "Translation, Physics and Facts of Matter" in Hahn & Schlip [1986] pp.139-154
- Guttenplan, S. (ed)
1975: *Mind and Language* (Oxford: Clarendon Press)
- Hahn, L. & Schlip, P. (eds)
1986: *The Philosophy of W.V. Quine* (La Salle, Ill.: Open Court)
- Hylton, P.
1991: "Translation, Meaning and Self-knowledge", *Proceedings of the Aristotelian Society* 91 pp.269-290
1994: "Quine's Naturalism", *Midwest Studies in Philosophy* 19, pp.261-282
- Quine, W.V.
1953: "Two Dogmas of Empiricism", in *From a Logical Point of View* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press) pp.20-46
 『論理的観点から』、飯田隆訳、勁草書房、1992 年]
1960: *Word and Object* (Cambridge, Mass.: MIT Press)
 『ことばと対象』、大出晃・宮館恵訳、勁草書房、1984 年]
1969: *Ontological Relativity and other essays* (New York: Columbia University Press)
1969a: "Ontological Relativity", in Quine [1969] pp.26-68
1969b: "Epistemology Naturalized", in Quine [1969] pp.69-90
 『自然化された認識論』、伊藤春樹訳、『現代思想』、1988 年 7 月号、48-63 頁]
1969c: "Natural Kinds", in Quine [1969] pp.114-138
1974: *The Roots of Reference* (La Salle, Ill.: Open Court)
1975a: "The Nature of Natural Knowledge", in Guttenplan [1975] pp.67-81
1975b: "Mind and Verbal Disposition", in Guttenplan [1975] pp.83-95
1976: "The Scope and Language of Science", in *The Ways of Paradox and other essays*, revised enlarged edition (Cambridge, Mass.: Harvard University Press) pp.228-245
1979: "Cognitive Meaning", *Monist* 62 pp.129-142
1981: "Five Milestones of Empiricism", in *Theories and Things* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press) pp.67-72
1986: "Reply to Morton White", in Hahn & Schlip [1986] pp.663-5
1990a: "Comment on Føllesdal", in Barrett & Gibson [1990] p.110
1990b: "Comment on Harman", in Barrett & Gibson [1990] p.158
1992: *Pursuit of Truth*, revised edition (Cambridge, Mass.: Harvard University Press)
 『真理を追って』、伊藤春樹・清塚邦彦訳、産業図書、1999 年]
1994: "Response to Hookway", *Inquiry* 37 pp.502-4

[哲学博士課程]

Quine's Naturalism

Naoki USUI

In "Five Milestones of Empiricism", Quine claims that his naturalism has two source, holism and unregenerate realism. Therefore, there are two arguments, each of which leads to Quine's naturalistic position. I think that they are each characterized by two themes implied by the metaphor of 'Neurath's boat', 'the mutual dependence of knowledge' and 'the historical inevitability of knowledge', and are based on Quine's two fundamental philosophical claims, physicalism and behaviorism. These arguments seem to suggest that Quine's naturalism is ambiguous, but I try to show they are consistent by drawing a clear distinction between 'underdetermination of theory' and 'indeterminacy of translation', which is a special case of the difference between physicalism and behaviorism. Finally I criticize Quine recently seems to abandon his own consistent distinction, and that conflicts with 'methodological monism', which is the basic these of Quine's naturalism.